

ソヴェト農産物価格の地帯別格差設定の問題

宮 鍋 幟

周知のように、現在のソ連ではコルホーズとソフホーズが農業生産の主要な担当者であることに対応して、国定の生産者価格たる「農産物調達価格」には「買付価格」(コルホーズのばあい)と「引渡価格」(ソフホーズのばあい)の2つがある。この両価格のあいだには、コルホーズが協同組合経営であるのに対してソフホーズは国営であるという経営形態上の差異を反映して、一般に前者の価格水準の方が後者のそれよりも高いというちがいが存在するが、それはともかく、このような2種類の価格から成る農産物調達価格には現在なおかなりの欠陥があるとされ、そのために最近のソ連においては、社会主義農業の現段階にふさわしい農産物調達価格とはいかなるものかが、とくに大きな問題となっている。そして、そのさい論議の対象となっている問題点としては、a) 農産物価格相互間の関係、b) 農産物価格の地帯別格差づけ、c) 買付価格と引渡価格の関係、d) 農産物価格と工業製品価格(とくに農業向け工業製生産財の価格)の関係、などがあげられている¹⁾。つまり、調達価格は一方では、コルホーズやソフホーズに生産費(原価)の補填と純所得(利潤)の獲得とを保證するものでなければならぬから原価以上でなければならぬが、他方それはまた、その純所得の1部を国庫へ集中する必要から価値以下でなければならぬという一般原則から出発して、上述の諸点をめぐる現行調達価格の欠陥ないし改善策について論議が交わされているわけである。

1) このうちc)とd)の問題は従来看過されていたが、最近ようやく検討されるようになったものである。たとえば、c)については Д. Кондрашев: Цена и стоимость в социалистическом хозяйстве. Москва, 1963. стр. 304~315. d)については А. Эстрина: Торговые связи колхозов с промышленностью. Москва, 1965. стр. 45~74.

この論文は、ソヴェト農産物価格形成をめぐるこれらの諸問題のうち、地帯別価格設定の問題をとりあつかうのであるが、しかし、ソ連の現行地帯別価格制度の分析を直接の対象とするものでもなければ、この問題についてのソ連経済学者の論議に直接参加する意図のもとに自説を積極的に主張しようとするものでもない。むしろそのような目的に接近するための準備作業のひとつとして、この問題にかんれんして最近発表されたエフ・テ・バシュークの注目すべき論文²⁾をとりあげ、そこにのべられている農産物価格の地帯別格差設定のための数理経済学的モデルの概要を紹介し、それにふくまれた若干の問題点を検討しようとするものである。

1 バシューク・モデルの概要

農産物調達価格をきめるさいに、ソ連では従来から同種農産物の価格に地帯別格差を設けることが行われてきた。このような地帯別価格の設定は、不平等な土地条件のもとにおかれている各コルホーズやソフホーズに、必要な純所得形成のための等しい条件をつくりだす意味で、「労働に應ずる分配」という社会主義的原則からいっても当然の措置であるが、このことはその反面、地帯別

2) Ф. Т. Басюк: Экономико-математическая модель зональной дифференциации заготовительных цен на сельскохозяйственную продукцию. (Т. Л. Басюк и др. [ред.]: Применение математических методов в экономических исследованиях по сельскому хозяйству. Москва, 1964. стр. 271~302.)バシュークは農産物「調達価格」といっても、実際にはコルホーズに対する買付価格を念頭においている。また、バシューク論文には数式にかなりの誤植があるが、以下の紹介では適宜訂正しておいたし、記号に使われているロシア文字もローマ字などに変えたことをお断りしておきたい。

価格が、相対的に有利な土地条件に位置するコルホーズやソフホーズにそのような土地条件にもとづいて形成される差額地代(差額の追加所得)を国庫へ収用するためのテコの役割を担うことを意味する³⁾。しかし、ソ連における実際の状況は、この地帯別価格の設定の仕方が不合理であるため、たとえば、ある地帯のコルホーズには多額の利潤が生じているのに他の地帯のコルホーズでは、ごくわずかの利潤しかえられないかときには欠損すら生じている、といった具合である。ではこの現状の不合理さを改善するにはどうしたらよいか。バシューク・モデルは、そのための1方法として提出されたものにほかならない。そしてこのモデルの特徴は、調達農産物に対する国家の可能支払金総額から出発して、まずこの支払金総額の農産物別(部門別)ならびに地帯別配分額を決定し、つぎにこの部門別および地帯別配分額にもとづいて各地帯の各種農産物の価格水準、つまり地帯別価格を決定する、という点にある。そこで以下、バシューク・モデルの概観をこの2つの段階にわけておこなうことにする。

a) 国家支払金の部門別・地帯別配分 地帯間への国家支払金総額の配分のさいに解決されねばならない第1の課題は、国家支払金によって各地帯の獲得する利潤額を決定することであるが、この関係を明らかにするために、バシュークはつぎのような簡単なモデルの構成からはじめる。

まず記号をつぎのように定める。 A_i …単一価格評価による*i*地帯の商品生産高($i=1, 2, \dots, m$), C_i … A_i の生産のための支出額, M_i …*i*地帯の商品生産高に対する国家支払金, Π …国家支払金総額($Q = \sum M_i$)にふくまれた利潤総額($\Pi = \sum M_i - \sum C_i$), Π_i …*i*地帯で獲得される利潤, I_i …*i*地帯に対する利潤分配係数。そうすると

$$I_i = \frac{A_i}{\sum A_i} \quad (1)$$

3) より厳密に言えば、買付価格や引渡価格は価格をとおして全経営から国庫へ収用される純所得部分および相対的優良地帯の経営から国庫へ収用される差額地代(差額の追加所得)分だけ農産物の社会的価値から低いことになる。

$$\Pi_i = \Pi \cdot I_i \quad (2)$$

$$M_i = C_i + \Pi_i \quad (3)$$

が成立する。このばあい Π, C_i は与えられているから、未知数は A_i, I_i, Π_i, M_i であって $4m$ 個あるのに対して、方程式の数は $3m$ 個しかないからこの連立方程式体系は一意的な解を持たない。つまり、 I_i を決定しそれによってえられる Π_i を媒介として M_i を求めるためには、 m 個の余分の未知数 A_i をなんらかの方法で決定しなければならない。そこでこの点を解決するため、バシュークはこのモデルをさらに精密化する。

そのために追加される記号はつぎのように定められる。 a_{ij} …物量単位による*i*地帯の*j*生産物の商品生産高($j=1, 2, \dots, n$), c_{ij} … a_{ij} の単位原価, M_j …*j*生産物全体に対する国家支払金($\sum M_j = \sum M_i = Q$), Π_j …*j*生産物にかんする利潤, k_{ij} … a_{ij} についての利潤分配係数, p_{ij} … a_{ij} の単位価格, c_j …*j*生産物の部門平均原価, \hat{p}_j …*j*生産物の地帯別価格(p_{ij})のうちの最高価格。そうすると

$$p_{ij} = c_{ij} + \Pi_j \cdot k_{ij} \quad (4)$$

$$\sum_{i=1}^m a_{ij}(c_{ij} + \Pi_j \cdot k_{ij}) = M_j \quad (j=1, 2, \dots, n) \quad (5)$$

$$\hat{p}_j = \max p_{ij} = \max (c_{ij} + \Pi_j \cdot k_{ij}) \quad (6)$$

$$k_{ij} = \frac{c_{ij}}{c_j} \quad (7)$$

がえられる⁴⁾。(4)式と(7)式によって、最劣等地帯において生産された生産物には最高の価格が設定されることがわかる。また、(6)式の意味は、『資本論』におけるマルクスの差額地代論の箇所の規定、すなわち農産物の市場調整価格は地代をもたらさない最劣等地の生産価格であるという規定を援用して、社会主義農業においても最劣等地において成立する最高価格が規制的価格であるとみなすことにほかならない。だが、このばあいの価格は資本主義のばあいのような生産価格ではない。というのは、(4)式に(7)式を代入して変形すると、 $p_{ij} = c_{ij}(1 + \Pi_j/c_j)$ となり、このばあいの価

4) じつはバシューク・モデルでは(7)式は $\sum_{i=1}^m a_{ij}c_{ij} \leq M_j$ のばあいであって、 $\sum_{i=1}^m a_{ij}c_{ij} > M_j$ のばあいには $k_{ij} = \frac{c_i}{c_{ij}}$ となる。

格形成原則は(原価)+(原価に Π_j/c_j を乗じてえられる利潤)という方式によっているからである。こうしてバシュークは、さきにもべた各地帯の商品生産高評価のための単一価格としてこの \hat{p}_j を採用する。したがって(6)式によって(1)式を書きかえると、

$$I_i = \frac{\sum_{j=1}^n a_{ij} \{ \max(c_{ij} + \Pi_j \cdot k_{ij}) \}}{\sum_{i=1}^m \sum_{j=1}^n a_{ij} \{ \max(c_{ij} + \Pi_j \cdot k_{ij}) \}} \quad (8)$$

となり、また(5)式から

$$\Pi_j = \frac{M_j - \sum_{i=1}^m a_{ij} c_{ij}}{\sum_{i=1}^m a_{ij} k_{ij}} \quad (9)$$

がえられる。

さて、(8)、(9)式から明らかなように I_i の値は、 Π_j を介して結局 M_j に依存する。したがって、 m 個の余分の未知数 A_i を決定するために追加された(4)式以下の方程式体系によっても結局、決定されるべき未知数の数は n 個の未知数 M_j だけ方程式の数より多くなって、精密化されたモデルはこのままではなお一意的な解をもたないことがわかる。そこでバシュークはこの難点をいわゆる iteration 計算によって解決するのであるが、その具体的な計算方法はつぎのとおりである。

まずなんらかの農産物調達計画が立てられたとすると、 $\sum_{i=1}^m M_i = \sum_{j=1}^n M_j = Q$ から

$$\sum_{j=1}^n a_{ij} p_{ij} = M_i \quad (i=1, 2, \dots, m) \quad (10)$$

$$\sum_{i=1}^m a_{ij} p_{ij} = M_j \quad (j=1, 2, \dots, n). \quad (11)$$

いま仮りに各地帯がその全資金を h 生産物 ($j=h$) によって得るとすれば、この生産物の規制的価格は(10)式から $\max(M_i/a_{ih})$ となり、したがって国家は(調達農産物 h をこの価格で実現すれば)他のすべての地帯において追加所得を受取るだろう。 $\max(M_i/a_{ih})$ が $i=r$ のもとで成立したとすると諸地帯 ($i \neq r$) で国家によって得られる追加所得額 (D_h) は

$$D_h = \sum_{i=1}^m a_{ih} \frac{M_r}{a_{rh}} - M_h$$

となり、これを一般化すると

$$D_j = \sum_{i=1}^m a_{ij} \left\{ \max \frac{M_i}{a_{ij}} \right\} - M_j \quad (j=1, 2, \dots, n) \quad (12)$$

の形で示される。つぎに、 $\sum D_j$ を計算して生産物種類あたりの平均追加所得額 (D') を決定する ($D' = \sum_{j=1}^n D_j/n$)。そうすると個々の生産物における追加所得の平均追加所得からの偏差 (D'_j) は $D'_j = D_j - D'$ である。また、国家の可能追加所得1単位あたりの利潤 (Π') は $\Pi' = \Pi/D_j$ となる。したがって、国家の最高の利得のためには利潤は

$$R_j = \Pi' \cdot D'_j \quad (R_j \cdots \text{再分配利潤額}) \quad (13)$$

の式によって生産物の間へ再分配されなければならないし、その結果、農産物別(部門別)の国家支払金は

$$M_j = M'_j + R_j \quad (14)$$

となる。このばあい M'_j は(部門の原価総額)+(部門の原価総額に平均収益率を乗じてえられた利潤)に等しい農産物別支払金である。かくて、このような iteration によって M_j を計算してゆけば部門別支払金とそれに相応した地帯別支払金 (M_i) を決定することができる。

バシュークは仮定的数字例による計算結果を示すために、2地帯2部門モデルを構成しているが、それがつぎに掲げる第1表である。それによると、I地帯でA生産物が100単位、B生産物が1500単位、II地帯でA生産物が1500単位、B生産物が100単位調達される。I地帯の原価はA生産物が150、B生産物が150、II地帯の原価はA生産物が100、B生産物が100である。国家はこれらの生産物の調達のために440000を支出する。地帯の費用合計は400000であるから、このばあいの収益率は10%となる。そうすると、農産物別および地帯別の国家支払金配分の可能な計画のひとつは、農産物別および地帯別の国家支払金がそれぞれ原価を10%うわまわるような計画であることは明らかだ。こうして第1表に記入されているように、農産物別支払金は181500(A生産物)と258500(B生産物)となり(これが M'_j である)、地帯別支払金は264000(I地帯)と176000(II地帯)となる。この可能計画から出発して前述の方法による iteration 計算を行うのであるが、その最終結果のみを

示しておく、この数例では農産物別および地帯別支払金の最適解は、 $M_A=185555$, $M_B=254445$, $M_I=259668$, $M_{II}=180332$ となる⁵⁾。

第1表

	A 生産物			B 生産物			地帯の支出	計画支払金
	調達量	単位原価	原価総額	調達量	単位原価	原価総額		
I 地帯	100	150	15000	1500	150	225000	240000	264000
II 地帯	1500	100	150000	100	100	10000	160000	176000
計(又は平均)	1600	103.125	165000	1600	146.875	235000	400000	
計画支払金			181500			258500		440000

b) 地帯別価格水準の決定 以上で農産物の部門別支払金と地帯別支払金とが決定された。つぎの問題は、これらの支払金にもとづいて各地帯の個々の生産物の価格水準(p_{ij})を決定することである。

このばあい各地帯の各生産物に対して設定された価格 p_{ij} は、なによりもまず(10)式と(11)式を同時に満足するものでなければならないが、バシユークによれば、さらにつぎの一連の要件を満たさなければならないという。すなわち、1) 生産物の単位原価が高いほどその価格も高い。これは地帯のばあいにも部門のばあいにもあてはまる。2) 地帯の商品生産高中に占める比重の高い生産物ほどその価格が高い。これは地帯のばあいにあてはまる。3) 部門の商品生産高中に占める比重の高い地帯ほどその収益率が低くなる。この要件は部門に対してあてはまる。4) 以前に設定された価格が原価に対して高ければ高いほど価格に対するその後の付加は少ない。

そこで地帯別価格に対するこれら一連の要求を数式化するために、新たにつぎの記号を追加する。 u_j …全農業部門の商品生産高中における j 部門の比重、 u_{ij} … i 地帯の商品生産高中における j 部門の比重、 w_{ij} … j 部門の商品生産高中における i 地帯の比重、 p_j … j 部門の生産物 1 単位の部門平均価格。そうすると、上述の 4 つの要件のうち 1) か

ら 3) まではそれぞれつぎのように表わされる。

$$f(c) = \frac{c_{ij}}{c_j + c_{ij}}$$

$$f(u) = \frac{u_{ij}}{u_j + u_{ij}}$$

$$f(w) = 1 - w_{ij}$$

4) については、地帯別価格の形成のさいには

$$f(p) = \frac{c_{ij}}{p_i + p_{ij}}$$

となり、部門別価格の形成のさいには

$$f(p) = \frac{c_{ij}}{p_{ij} + 1}$$

となる。

ところで、いま i 地帯の j 生産物 1 単位あたりの利潤を Π_{ij} とすれば、任意の生産物の価格は $p_{ij} = c_{ij} + \Pi_{ij}$ で示される。したがって生産物原価 (c_{ij}) が与えられていれば、以上に列挙された価格運動の合法則性は結局、生産物原価に付加される利潤の大きさとかんれんする。すなわち地帯別価格計算のさいには $\Pi_{ij} = f(c, u, p) = \Pi'_i \cdot F_{ij}$ であり、部門別価格計算のさいには $\Pi_{ij} = f(c, w, p) = \Pi'_j \cdot I_{ij}$ であって、かくて地帯にとっては

$$p_{ij} = c_{ij} + \Pi'_i \cdot F_{ij} \quad (15)$$

であり、部門にとっては

$$p_{ij} = c_{ij} + \Pi'_j \cdot I_{ij} \quad (16)$$

である。そこで(10)式に(15)式を、(11)式に(16)式をそれぞれ代入して Π'_i, Π'_j を求めれば、

$$\Pi'_i = \frac{M_i - \sum_{j=1}^n a_{ij} c_{ij}}{\sum_{j=1}^n a_{ij} F_{ij}} \quad (17)$$

$$\Pi'_j = \frac{M_j - \sum_{i=1}^m a_{ij} c_{ij}}{\sum_{i=1}^m a_{ij} I_{ij}} \quad (18)$$

がえられる。

残された問題は F_{ij}, I_{ij} の値をいかに決定するかということであるが、バシユークは指数方法を用いてこれをつぎのように決定する。すなわち、

$$F_{ij} = \frac{c_{ij}}{c_j + c_{ij}} \cdot \frac{u_{ij}}{u_j + u_{ij}} \cdot \frac{c_{ij}}{p_j + p_{ij}} \quad (19)$$

$$I_{ij} = \frac{c_{ij}}{c_j + c_{ij}} \cdot \frac{c_{ij}}{p_{ij} + 1} \cdot (1 - w_{ij}) \quad (20)$$

5) 念のため、このばあいの生産収益率(原価に対する利潤の比率)を示しておく、A生産物で12.45%、B生産物で8.27%、I地帯で8.19%、II地帯で12.71%である。

さて、 M_i と M_j が既知であるから、 F_{ij}, I_{ij} が決定されれば各地帯の各生産物の価格を計算することができるが、しかし、(19)式と(20)式では mn 個の未知数 p_{ij} がふくまれていて、したがってこのままでは F_{ij}, I_{ij} を決定できない。そこでこの p_{ij} に仮定的数値を代入しやはり iteration 計算を行うほかはない。その計算手続きはつぎのようになる。

まず $p_{ij}=p_j$ として F_{ij} と Π'_i を求め、これを(15)式に代入して地帯別価格 p_{ij} を決定する。えられた p_{ij} を(11)式に代入して M_j^* を得る。そしてこの M_j^* を M_j と比較するわけであるが、そのさいつぎの3つのばあい考えられる。すなわち 1) $M_j^* > M_j$, 2) $M_j^* = M_j$, 3) $M_j^* < M_j$ である。2) のばあいには(10)式と(11)式が同時に満足されるから p_{ij} をより精密化する必要はない。3) のばあいには、 $p'_{ij}=p_{ij}+\Pi'_j \cdot I_{ij}$ によって $M_j-M_j^*$ の差額の地帯間への分配を続け、価格計算を継続する必要がある。このばあい分配される利潤は $M_j-M_j^*$ の大きさであるから、 I_{ij} は地帯内で国家支払金の配分のさいにえられた価格(p_j ではなくて p_{ij})で換算される。1) のばあいには、地帯間への欠損の分配が問題となるために、 I_{ij} の値が満たさねばならない要請もつぎのように変化する。すなわち 1) 原価の増大につれて価格低下はおくれる。2) 部門の商品生産高において大きな比重を占める地帯では欠損も多額にならなければならぬ。3) 以前に設定された価格が原価に対して低ければ低いほどその後の価格低下は小さい。そしてこれらの要請をバシユークはそれぞれつぎのように表わす。

$$f(c) = \frac{c_j}{c_{ij}}$$

$$f(w) = w_{ij}$$

$$f(p) = \frac{p_{ij}}{c_{ij}}$$

したがって欠損の分配のさいの分配係数(I'_{ij})は

$$I'_{ij} = \frac{c_j \cdot p_{ij} \cdot w_{ij}}{c_{ij} \cdot c_{ij}} \quad (21)$$

となる。こうして地帯間への部門別利潤(もしくは欠損)の再分配の結果、(11)式の条件を満たす

新しい地帯別価格(p'_{ij})がえられるだろう。

そこでつぎに、ふたたびこの p'_{ij} を(10)式に代入してみる。まえと同様に、ここでも 1) $M_i^* > M_i$, 2) $M_i^* = M_i$, 3) $M_i^* < M_i$ の3つのばあいが生じうる。2) のばあいには(10)式と(11)式がともに満たされるから、その価格は最終的なものである。3) のばあいには地帯で $M_i-M_i^*$ に等しい利潤を(19)式を利用して個々の生産物間に分配しなければならぬ。そのさい F_{ij} の値はもちろん、えられた価格(p'_{ij})にしたがって計算し直される。1) のばあいには地帯の個々の生産物の間へ $M_i-M_i^*$ に等しい欠損が分配されなければならぬ。バシユークはこの欠損の分配のばあいには、第1に、原価が大きくなればなるほど価格低下がおくれること、第2に、以前に設定された価格が生産物原価に対して低ければ低いほどその後の価格低下は少ないこと、第3に、地帯の商品生産高中に占める生産物の比重が大きければ大きいほど、この生産物の価格にふくまれる欠損はそれだけ少なくなること、しかし他方、地帯の商品生産高中の生産物の比重が小さければ小さいほどこの生産物の価格にふくまれる欠損は少なくなることもありうること、という3つの条件が満たされねばならぬとし、これらをそれぞれつぎのように数式化する。すなわち、

$$f(c) = \frac{c_j}{c_{ij}}$$

$$f(p) = \frac{p_{ij}}{c_{ij}}$$

$$f(u) = \frac{u_{ij}}{u_j+u_{ij}} \cdot \frac{u_j}{u_j+u_{ij}}$$

したがって、地帯の生産物間への欠損の分配のさいには

$$F'_{ij} = \frac{c_j \cdot p_{ij} \cdot u_{ij} \cdot u_j}{c_{ij} \cdot c_{ij} \cdot u_j+u_{ij} \cdot u_j+u_{ij}} \quad (22)$$

が分配係数となる。

以上が M_i, M_j が決定されたのちの地帯別価格水準の決定方法の概略であるが、バシユークはここでもこの決定方法を数例で検討している。第2表として掲げてあるのがそれである。みられるとおりに、ここでは、 $M_A=185620, M_B=254380,$

第2表

	A 生産物			B 生産物			地帯別の支出 $\sum_{i=1}^n a_{ij}c_{ij}$	地帯別の支払金 M_i
	調達量 a_{ij}	単位原価 c_{ij}	原価総額 $a_{ij}c_{ij}$	調達量 a_{ij}	単位原価 c_{ij}	原価総額 $a_{ij}c_{ij}$		
I 地帯	100	150	15000	1500	150	225000	240000	259663
II 地帯	1500	100	150000	100	100	10000	160000	180337
生産物別支出		c_j	$\sum_{j=1}^m a_{ij}c_{ij}$		c_j	$\sum_{j=1}^m a_{ij}c_{ij}$		
		103.125	165000		146.875	235000	400000	
生産物別支払金		p_j	M_j		p_j	M_j		$\sum M_i$
		116.01	185620		158.99	254380		440000

$M_I=259663, M_{II}=180337$ となっており、このそれぞれの値は第1表に示された条件による計算結果として決定された M_A, M_B, M_I, M_{II} の値と僅かながらくいちがっているが、その理由は明らかでない。第1表についてと同様、ここでも第2表の数例の条件にもとづく計算の最終結果のみを示しておく、 $p_{IA}=156.21, p_{IB}=162.70, p_{IIA}=113.27, p_{IIB}=102.75$ であり、この価格のもとでの収益率(原価に対する利潤の比率)はI地帯ではA生産物が4.14%、B生産物が8.47%、II地帯ではA生産物が13.37%、B生産物が2.75%である。

2 特徴と問題点

以上が地帯別価格設定のためのバシューク・モデルの概要であるが、つぎにその特徴と問題点を指摘しよう。その特徴の第1は、バシューク・モデルが当面の改善策のための静態モデルであるということである。部門別価格ならびに地帯別価格設定の問題をとりあつかうばあいに、1)ソ連農業の現在の生産配置と専門化ならびに農産物調達に対する現在の国家可能支払金とを前提する価格水準の設定、2)農産物生産および調達の最適計画にもとづいた価格水準の設定という2つのアスペクトを区別することができようが、バシューク・モデルは以上の概観から明らかのように、このうちの1)のアスペクトからの地帯別価格設定のモデルであって、長期をめざす動態モデルではない。しかし、地帯別価格改善にかんするソ連経済学者の論議のほとんどが、価格地帯の数をふやすとともに地帯別価格の最高・最低の価格間の格差を拡大すべしといった一般的・抽象的な提言に終始し

ていることと対比して、短期的・静態的であるとはいえず、ともかく計量可能なモデルを細かく規定した点にバシューク論文の意義を認めなければならないと思う⁶⁾。

バシューク・モデルの特徴の第2は農産物の社会的価値規定の問題とかんれんし、その第3は農産物価格形成原則の問題とかんれんする。周知のように、社会主義のもとでの農産物の社会的価値規定については、ソ連の経済学者のあいだでは、社会主義のもとでは農産物の社会的価値が平均的生産条件のもとでの個別的価値によって決定されると解釈する立場(ストルーミリン、ソコロフ、ヴェンジェルなど)と、それが最劣等地での標準的経営における個別的価値によって決定されると主張する立場(テ・エリ・バシューク、コゾドエフ、バシューコフ、ボルゴフなど)とが対立している⁷⁾。バシューク・モデルでは、たとえば、利潤分配係数 $k_{ij} = \frac{c_{ij}}{c_j}$ とすることによって最劣等地帯におい

6) 最近ソ連における農業経済研究への数学利用はいちじるしい進展をみせ、その成果を示すものとして、注2)に掲げたもの以外に、И. Попов: Математические методы в экономических расчетах по сельскому хозяйству. Москва, 1964; А. Белов: Математико-экономические расчеты в сельском хозяйстве. Алма-Ата, 1965.; Р. Кравченко: Экономико-математические модели задач по сельскому хозяйству. Москва, 1965. などがあるが、取りあげられている問題は農業生産の最適配置のモデルや、コルホーズ経営内の最適生産計画、飼料の最適配合などのモデルの作成が中心であって、農産物価格水準の設定のためのモデルは、このバシューク・モデルが現在までのところわれわれの知りうる唯一のものである。

7) この論争については、『経済研究』14巻2号(1963年4月)所収の拙稿を参照。

て最高価格が成立するように構成され、さらにこれを農産物の規制的価格として単一価格評価に利用する点にうかがわれるように、明らかに社会主義のもとでの農産物の社会的価値規定についてパシュコフ、ボルゴフらの立場を採用している。

つぎに、価格形成原則についていえば、これまたよく知られているように、ソ連学界では工業卸売価格について価値方式(ストルーミリン、クロンロードなど)「平均」価値方式(コンドラシェフその他)、生産価格方式(アトラス、マルイシェフ、バーグなど)、「較差支出」方式(カントロヴィッチ、ノヴォジロフ)などが対立しあっている。そしてこれを反映して最近では、農産物価格についても、価値方式(ストルーミリン、ティモーヒン)、「平均」価値方式(コンドラシェフ)、生産価格方式(ロマンチュンコ)の対立がみられるようになった⁸⁾。パシュコフ・モデルでは従来どおりの価格形成原則、つまり価格のなかの原価に付加されるべき利潤額を原価に対する一定率で決定するという原則に立っていること、しかし、この一定率を全部門ならびに全地帯に単一のものとしていない

ことはすでにみたとおりである。「平均」価値説の主張者コンドラシェフが単一の収益率を主張しているとすれば、パシュコフ・モデルでは、これは価格設定の可能計画のひとつにすぎず、その最適計画は分化された収益率を示している。

さいごに、このようなモデルの問題点ないし欠陥として、とりあえずあげるのは、そこでは、計算される価格と、農産物の内部流通(生産的消費)とが断絶していることである。つまり、たとえば、A生産物を穀物、B生産物を畜産物とすれば、A生産物はそのものとしてばかりではなく、B生産物の生産にA生産物が利用されるということによってB生産物をとおしても実現されるのに、パシュコフ・モデルではこのことが全く考慮されていないのである。農産物の国家調達高ばかりでなく、総生産高から出発して、その実現のルートを検討し、A生産物生産の利潤が一部はA生産物の価格をとおし、一部はB生産物の価格をとおして実現されることを考慮に入れた価格設定モデルを構成することが必要であるように思われる。

8) ここでは、農産物価格形成(いずれもコルホーズの買付価格)について以上の各主張者の文献のみを示すにとどめるが、それはつぎのとおり。С. Струмилин: Некоторые проблемы дальнейшего развития колхозного строя.《Вопросы экономики》No. 5,1958.; П. Тимохин: О методике исчисления дифференциальной ренты в колхозах.《Экономика сельского хозяйства》No. 8,1964.; Д. Кондрашев: Система цен и задачи коммунистического строительства.《Экономика сельского хозяйства》No. 9,1962.; Г. Романченко: Чистый доход и образование цен на сельскохозяйственную продукцию колхозов.《Экономика сельского хозяйства》No. 12,1965.